

立していました。その一つが、横川端に直線的に並んだ町家の周辺域です。

ここは、文献史料を参照する限り家禄の低い下級御家人と町人との混住が進んでいた地域で、元来御家人らが拝領した組屋敷が町家へと姿を変えるなどといった動きが見られます。また、下級御家人の住居として存続した所でも、江戸時代の後期ともなれば居住者の移動が激しくなり、役職を同じくする者どうしが集住する本来の形態が崩れていった様子もわかってきます。

町人社会との日常的な接触が当然のものとなった下級御家人の暮らしが一体どのようなものだったのかは必ずしも明らかではありませんが、異なる身分に属した人々どうしの接触が見えてくる辺りに本所というマチの特質を解く鍵があると思われます。

そこで、この度の企画展では武家屋敷跡から出土した遺物とともに亀沢4丁目で発見された遺跡を紹介します。

亀沢4丁目10番地に所在する遺跡は武士と町人がが混住した場所から発見されたもので、その遺構からは実に多様な遺物が大量に出土しています。遺物整理はまだ完了していませんが、ひとあし先にそうした本所ならではの真相に触れて頂ければ幸いです。

本所に埋葬された人々

ところで、様々な身分の人々が生活するようになった本所には、多くの寺院がありました。後に移転したものもありますが、江戸時代には数十のお寺があったのです。そして、そうしたお寺の跡地からは、近年、江戸時代のお墓が相次いで発見されています。

墓跡発見の端緒

墨田区における墓跡の発見は、昭和60年に行われた普賢寺遺跡(東駒形一丁目)の発掘調査を端緒としています。普賢寺は浅草寺の末寺で東京大震災後の区画整理とともに転出した寺院です。調査面積はわずか40㎡でしたが10基の墓跡が見つかり、箱形木棺1基と早桶9基が掘り出されました。そして、人骨とともに墓標や腹部の膨らみが特徴的な土人形が出土するなど、江戸時代



亀沢4丁目で発見された徳利

の葬送儀礼を知るうえで大変重要な発見をもたらしたのです。

本所の墓

さて、このようにして発見されるようになった本所の墓跡ですが、そこにはいくつか注目すべき特徴があります。その一つが埋葬形態の多様性です。これまでの



木棺内景(成就寺跡)

調査では陶製の甕棺や木棺(木製の箱)、桶(早桶)、骨蔵器などが発見され、亡くなった人の身分や経済的条件、信仰の内容によって埋葬形態に違い

の生じたことが分かってきました。

また、それら埋葬施設の出土状況も非常に重要で、同一地点から埋葬形態の異なる墓が一度に出てくることもありました。こうした出土状況は、身分や貧富によって差別された人々が同じ墓域に墓をもった可能性をも示唆しています。



墓の出土状況(本佛寺跡)

さらに、複数の墓跡が重層化しているケースも多数見出されます。例えば、成就寺跡では何層にも積み重なった状態で人骨や早桶が出土しているのです。これは、狭い同一墓域に数多くの墓が作られたことを意味しています。

元禄年間より人々の入植が本格化した本所。発見される墓の全てが本所に暮らした人々のものではないでしょうが、ここには200年をかけて織り上げられた人々の歴史が眠っていると見えるでしょう。

(竹内裕信、川本恭子、中山 学、村上晃子)

墨田区内の主な遺跡

ここからは、墨田区内で発掘調査された、主な遺跡について紹介します。

横川一丁目遺跡

〔所在地〕横川一丁目15番地

〔概要〕大横川の東側に面したこの地は、江戸時代後期には、5,000石の旗本太田家の抱屋敷(百姓地を購入して建てた屋敷)があったと絵図などから、推測されます。屋敷地は当時1,749坪で、東側を表間口としていたようですが、屋敷の裏手にあたるわずかな範囲が発掘調査されました。

明治に入り、屋敷は太田家の手を離れ、以後、様々な工場の敷地として利用されていました。特に明治25年(1892)から昭和20年(1945)までこの地にあった三田土ゴムは、近代ゴム産業発展の礎として著名な企業でした。

〔主な遺構・遺物〕横川一丁目遺跡からは溝や建物跡など合計123基の遺構が検出され、その遺構に伴い総数で10,744点の遺物が出土しています。

遺構のうち、調査地を南北に縦断する形で発見された大きな溝は、この地が太田家の抱屋敷になる以前の遺構です。これはこの付近まで引かれていた「本所上水」であった可能性も指摘されています。また、遺構のほとんどが池や溝など利水・治水のためのものでした。江戸時代の本所開拓以降、地盤の悪い土地での排水、あるいは横川からの引水による水の利用が窺え、水辺の環境の中での暮らしぶりを垣間見ることができます。

遺物では、「太田」と釘書きされた徳利などの陶磁器類や瓦など旗本屋敷と関わりのある資料のほか、三田土ゴム関連の遺物など、近代以降の資料の出土も目立ちました。



「太田」の釘書がある徳利

ほんじょあくらあと 本所御蔵跡

〔所在地〕横網一丁目

〔概要〕現在のJR総武線両国駅の北に位置するこの一帯は、江戸時代には「本所御蔵」と呼ばれた幕府の蔵地が、明治時代には「陸軍被服廠」が置かれていました。

万治元年(1658)から始まった本所の開拓直後は、「御材木蔵」との名称でしたが、享保18年(1733)には「御米蔵」とされ、対岸の浅草御蔵の補助的機能を果たしていました。19世紀初頭の敷地内には、21棟150戸前の蔵と入堀がありました。

明治5年(1872)に陸軍省の管轄となり、同19年には「陸軍被服廠」として、戦時に補給するための被服類等を貯蔵していました。被服廠跡は大正12年(1923)の関東大震災の際には、火災で多くの人々が亡くなり、悲劇の場所として記憶されることとなります。

〔主な遺構・遺物〕石材を積み上げて構築された遺構が発掘されました。これは、江戸時代の米蔵で



本所御蔵の施設の石組の様子

あった可能性と、石組下水であった可能性が指摘されています。レンガ積の倉庫と考えられる遺跡も出てきました。陸軍省は、江戸時代の御蔵を順次取り壊しながら、レンガ積の倉庫を新築したのです。また、本所、深川の開拓に際して行われたと考えられる厚い盛土の堆積も見つかりました。

遺物では、近世・近代の資料が出土しています。中でも、被服廠で使用されたと見られる「陸軍被服廠」と墨書された木札が注目されます。

錦糸町駅北口遺跡

〔所在地〕錦糸一丁目2番地

〔概要〕JR総武線錦糸町駅の北西部、現在すみだトリフォニーホールやアルカウエストなどが建つこの地は、江戸時代には、武家屋敷が建ち並ぶ地域でした。

錦糸町北口地区市街地再開発に伴い、再開発組合から委託を受けた調査団が、平成5年(1993)に埋蔵文化財の調査を行った結果、旗本^{おおしま}大嶋家屋敷、信濃小諸^{しなのこもろ}藩^{まきの}牧野家下屋敷、御賄組^{おまかいぐみ}大縄地^{おおなわち}の組屋敷などが存在したと推測される地域の遺跡が良好に遺存していることが明らかになり、同年4月から発掘調査が行われました。

〔主な遺構・遺物〕大嶋家の屋敷地と牧野家下屋敷地に該当する第一調査区からは、建物跡^{すいきんくつ}や水琴窟など68基の遺構が検出され、遺物68,027点が出土しました。

本調査区で最も多く遺物が出土したのは、大嶋家の廃絶後にゴミ穴として利用されたと考えられる池跡(第51号遺構)からで、12,211点もの遺物が出土しました。本遺構から出た遺物の特徴は、揃いで出土する陶器や磁器などが多いことがあげられます。また、天保2年(1831)の大小月の組み合わせを示した木製大小曆(墨田区登録有形文化財)が本遺構から出土しましたが、江戸時代の^{だいしゅうれき}大小曆は、紙に書かれたもの以外、発見されておらず、大変貴重な資料であることが調査によって明らかになりました。



出土品の中でも貴重な鍋島焼^{なべしま}

御賄組大縄地に該当する第7調査区からは建物跡や下水など約51基の遺構が検出され、24,693点の遺物が出土しました。本調査区からは、約9個体分の西洋磁器片が出土しました。

太平四丁目遺跡

〔所在地〕太平四丁目1番地

〔概要〕本遺跡は、元禄16年(1703)から明治初年頃まで存在した、近江膳所^{おうみぜせ}藩^{ぜせ}本田家の下屋敷の一部と推測されます。



庭の池跡

明治以降は、精工舎^{せいこうしゃ}(現、セイコーホールディングス株式会社)の本所柳島^{やなぎしま}工場となりますが、平成9年(1997)に工場が閉鎖され、跡地が再開発されることが決定します。これをうけて、平成14年(2002)3月に埋蔵文化財の確認調査が行われた結果、江戸時代の遺構の存在が確認され、同年6月から発掘調査が開始されました。

〔主な遺構・遺物〕本遺跡からは、江戸時代の地層から、面積およそ400㎡の池跡が確認されました。池跡の周辺からは、建物跡が確認されなかったため、本田家下屋敷の庭園部分であったことが推測されます。

この池は、明治30年代頃に精工舎の工場建設に伴って埋め立てられたことが遺物から推測できました。池の埋め立て後に造成された土地からは、建物の基礎や下水跡、ゴミ穴などが発見されました。

本遺跡からは、陶磁器類3,150点、瓦835点、木製品409点、金属製品645点、ガラス製品310点、その他1,761点、総数7,110点の多種多様な遺物が出土しました。

特徴的な遺物として、近代のゴミ穴から出土した、ガラスが溶着した大型陶器の陶片と、熱を受けた筒状ガラス製品があげられます。これらの遺物は、ガラスの成形などを行う過程で生じた廃棄物と考えられます。創業間もない精工舎に由来する可能性がある遺物であり、墨田区の近代産業に関わる貴重な資料であるということが推測できます。

ひぜんひらどしんでん まつら
肥前平戸新田藩松浦家下屋敷跡

〔所在地〕錦糸四丁目16番地

〔概要〕本遺跡は、元禄14年(1701)から明治初年頃まで、肥前平戸新田藩松浦家の下屋敷があった所の一部と推測されています。平戸新田藩は、肥前平戸藩の支藩でした。本藩である平戸藩の歴代藩主には、随筆「^{かつしやわ}甲子夜話」の著者、^{まつらせいざん}松浦静山がいたことで知られています。

この地は、戦後、東京簡易裁判所墨田分室庁舎が建てられましたが、平成16年(2004)に庁舎の建て替えが決定したため、同年9月と翌年9月に埋蔵文化財確認調査が行われた結果、江戸時代の遺構が確認されたため、18年5月から発掘調査が開始されました。

〔主な遺構・遺物〕本遺跡の主要な遺構は、池跡と溝です。建物跡などが発掘区域から発見されなかったことから、平戸新田藩下屋敷の庭園部分に相当する場所であったことが推測できます。出土した池は、護岸の構造から、潮の満ち干きによって水位が変化する汐入式の池のような構造が意識されたことがうかがわれます。また、溝の護岸の構造や規模、杭や土層の状態、屋敷の位置関係から、舟を屋敷内に引き込むための水路があったことが想像できます。

本遺跡からは、陶磁器類、瓦類、木製品など、総数2,282点の遺物が出土しました。



池跡から出土した釜

出土した遺物の中で注目されるのが、釣りに使う漆塗りの浮きや釜(魚を捕らえる罟)です。本所・深川地域には、江戸時代に多くの釣り場が存在していたことが明らかになっていますが、こうしたことを裏付ける、地域の特徴を示す資料であるといえるでしょう。

江東橋二丁目遺跡

〔所在地〕江東橋二丁目19番地

〔概要〕この地は明暦の大火以後に行われた本所開



遺跡全景(総武線南側)

拓によって本格的に開発された、武家屋敷が集中していた地域です。文献や絵図類などによれば、延宝8年(1680)には鉄砲方田付景利の与力5騎同心32人の組屋敷でした。その後、上地の期間を経て、元禄6年(1693)に豊前

杵築藩主松平志摩守重賢が拝領したのを始めとして、幕末にいたるまで計6家の大名・旗本が次々この土地を拝領していきました。

幕末期には2,000石の旗本夏目家の下屋敷となっていました。明治6年(1873)の「東京六大区沽券地図」には所有者が記されていないため、この頃に新政府に収公されたとみられます。

〔主な遺構・遺物〕本遺跡からは建物跡、杭列、井戸、池など188基の遺構が検出されています。この地は、複数の武家の屋敷地として変遷してきたため、旗本村越家、旗本夏目家の屋敷とみられる遺構がそれぞれ検出され、いずれの屋敷でも庭園の池跡が見つかっています。北側に隣接する錦糸町北口遺跡においても旗本大嶋家の庭園の池が検出されており、このことは山の手の武家屋敷とは異なるこの地域の特徴として捉えられます。

また、166,493点の遺物が出土していますが、その中には約8,000点もの人形・泥面子・土玉などの、土製の玩具類(墨田区登録有形文化財)が含まれていました。土製品と符合する土製型や、泥面子を制作する際できた型抜き生地、製作中に溶着したとみられる泥面子が出土したことから、この地でこれらの土製品が製作されていたと推測されています。

陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡

〔所在地〕亀沢2丁目

〔概要〕亀沢2丁目から緑2丁目にかけての範囲に、元禄4年(1691)以後、今の青森県弘前市に藩庁を置く弘前藩津軽家の上屋敷がありました。江戸時代の屋敷の絵図を見ると、中央部に藩主とその家族が住む御殿があり、南部に壮麗な表門、また屋敷の周囲に藩士達の住む長屋があったことがわかります。

本所の武家屋敷は、別邸として使われた大名の下屋敷のほか旗本や御家人の屋敷が多く、上屋敷はほとんど見当たりません。発掘調査が行われたのは屋敷地の一部ですが、それによって、大名の上屋敷がどのような構造であるのか、その一端を解明する貴重な手がかりを得ることができました。

〔主な遺構・遺物〕出土した木や竹で組んだ長い管は、木樋・竹樋という当時の水道管の遺構です。樋同士を接続する継手という設備のほか、桶・井戸など整備された上水施設が良好な状態で出土しました。物資の貯蔵施設として、木材で壁や床を構築し

た穴蔵や、多量の石で基礎を根固めした土蔵や建物跡も見つかっています。切石を積み上げた石垣状の遺構は、長屋の区画溝と考えられます。雨水を屋敷外に排水する施設を兼ねていたようです。また



まとめて捨てられていた揃い物の染付皿

コの字型に整地された穴からは、大量の貝殻が出土しました。これほど多くの

貝殻が廃棄された例は、他の江戸遺跡でもあまり見られません。これは、低湿地の地盤整備のために、貝殻を敷き詰めた可能性も考えられます。

この屋敷はたびたび火災にあったようで、時期は特定できませんが、火災の後、焼けた土や壊れた陶磁器などを捨てたと思われる穴も見つかかり、揃い物の染付皿などが出土しています。

平成 20・21 年度の寄贈資料と寄贈者をご紹介します

ご寄贈ありがとうございました。

平成 20 年度

資料名	氏名・団体名
算盤	岡野 郷子
写真	五月女 博
紙幣ほか	斎木 米次
図書	中村 俊彦
図書	芥川 龍男
図書ほか	小川 成則
牛嶋尋常小学校卒業記念アルバム	武藤 一路
戦前のアルバム	奥山 美紗子
図書・地図	西原 美恵子
区会議員当選証書ほか	城戸 房嗣
軍事郵便	児玉 春房
雛人形	本郷 豊
図書	西原 安夫
関東大震災の被災写真	坂井 紘彌
昔の紙幣	星野 トシ子
図書	恩田 貞雄
出征時の国旗	長谷川 豊三
震災写真集	岡部 久子
写真	甚野 年子
写真	酒巻 敏雄

のこぎり

拓本ほか
関東大震災関係資料
戦時中の債権ほか
貯蓄債権ほか

(以上、敬称略・順不同)

杉山 鈿司
中野 日出夫
神子 雅男
矢筈原 實郎
本多 悦男

平成 21 年度

資料名	氏名・団体名
雛人形ほか	山中 つや子
人形ほか	山下 チヨ
雛人形	田宮 洋一
拓本ほか	中野 日出夫
写真ほか	島田 千鶴子
地図	岡野 フク
図書	田中 宏
絵葉書	星田 和子
手拭い	山田 芳一
伊藤製パン資料	佐藤 澄夫
写真ほか	飯沼 喜久夫
図録	帆風美術館

(以上、敬称略・順不同)